

動こうとしなかったCITES（ワシントン条約締約国会議）

第16回ワシントン条約締約国会議が先月開催されました。誰もが聞きたいのは、「ゾウを守るためにどんな措置がとられたか」です。

会議が始まった時、理想的な者は既存の象牙取引禁止の延長と、それ以上に象牙売却の全面禁止を期待していました。少なくとも、売るのは違法だとはっきりとわかるように、象牙売却に伴う混乱を取り除く状況を期待しました。現実的な者は、象牙密輸の経由港の警備強化のための国際的な資金がすぐにでもいる、と会議が言うのを期待したかもしれません。もしかしたら、会議が採った象牙取引メカニズムは大失敗だったとCITESがはっきり明言することも期待していたかもしれません。なぜなら、CITESが認可した「二度」にわたる「一度きり」の象牙売却（1997年と2008年）の後、象牙取引に使うためにゾウの密猟が確実に増加したからです。過ちを認めることで、CITESは対策を講じることができたはずなのです。禁止を延長することと、違法象牙が国境を越えることを防げなかった国や監視が行き届かず違法象牙の売却を見逃してしまった国への罰則の導入で、状況を打破しようとできたはずなのです。

現実的な予想でさえも実現しない時は誰でもがっかりします。しかし今、象牙のためのゾウ殺しが1989年の取引禁止以前から見ても過去最低であるというのに、CITESは全く動かなかったのです。

とはいってもすべてが悪かったわけではありません。押収象牙が対象のDNAテストを導入するという新規定に励ましを見出すべきです。今後500キロ以上の押収では、差し押さえられた象牙はすべて集められ、適格な科学捜査施設にてDNAテストをして出所を突き止めるという計画です。うまくいけば、これで象牙取引を抑え込むことができます。

そのほか、すべての押収象牙を監視する世界的なデータベースの必要性に注目する声もありました。それとともに、締約国各国が押収した備蓄象牙について毎年報告するよう求められました。CITESは、アフリカゾウと象牙取引が再度焦点となる2014年6月までに相当な進歩があるべきだと通告しました。しかしそれまでに16か月もあり、現在の密猟レベルで考えると、その間に35,000頭のゾウが命を落とすおそれがあります。

この時間枠は主に「ギャング・オブ・エイト」と呼ばれる8か国に向けて当てられたものです。これらの国は、より厳しい刑法と法律を通して違法象牙取引を取り締まるべき国です。会議が特定したギャング・オブ・エイトは、出所である国々ケニア、タンザニア、ウガンダ、経由国であるマレーシア、フィリピン、ベトナム、そして最大市場である中国とタイです。これら8か国は、象牙取引を抑えるための努力を十分にしていないと指摘されました。8か国（や他の国々）が、貿易港の取り締まり強化や象牙売却を監視するためにより積極的に動くべきであるのははっきりしています。しかし、これら8か国が各自努力していく中、CITES側がどのように支えていくのかという計画はまったく出ませんでした。つまり、単に指さし名指ししただけです。この方法は生産的ではありません。なぜなら、ケニアのように港の警備や現場での野生動物保護に積極的に力を入れている国を疎外するおそれがあるからです。

CITES開幕の際、タイのインラック・シナワット首相がタイ国内の多大な違法象牙取引に終止符を打つと表明したことがおおいに注目を集めました。それはそれで大変前向きで勇気づけられるステップですが、いつ禁止するのかについては全く触れていません。また、中国が世界最大の象牙消費国であることは国際的に指摘されており、合法・違法ともに大量の記録

があります。中国に圧力をかけ、そして、違法象牙の販売者を逮捕し、裁判にかけ、重い刑に処さなければ、ゾウの未来は安定しません。

象牙密猟の危機は簡単には乗り越えられない、とは誰もが承知です。しかし、CITESが問題の程度を認識せずに、種を保護するために真っ向から動かなかったことで、我々のゾウ保護活動はかなりの打撃を受けました。参加国の国家関係に影響が及ぼされると恐れたCITESは、毎回論争になるゾウと象牙の課題に今回もしり込みしたのです。そのために今度もまた、この国際的な機関が、取引のためではなく「種」のために、いつ何をするのかわからない状態のままなのです。

デイビッド・シェルドリック・ワイルドライフ・トラスト (DSWT) は第16回締約国会議に先がけてアイ・ウォリー運動を開始しました。運動のメッセージはただひとつ、「象牙にノーと言う」ことです。この趣旨に沿って集めた署名を、会議開催中にワシントン条約事務総長ジョン・スキャンロン氏に提出しました。4万を超える署名をスキャンロン氏の手元へ届ける役を果たしたエンバイロンメンタル・インベスティゲイション・エイジェンシー (EIA) に感謝します。ゾウを守るためのアクションを期待して見えていますよ、と我々と署名者は事務総長に伝えたのです。けれどもCITESその他からアクションは出てきませんでした。今回の会議はいくつもの主要種に関して失望的なものでした。ですから、DSWTのような非営利団体がゾウのために戦い続けなくてはなりません。

DSWTの反密猟班は、上空から見回る航空班と共に、現場でのゾウ保護に努めています。ケニア野生生物公社 (KWS) とも連携し活動しています。我々の巡回獣医班は3班あり（2013年1月現在）、傷を負った野生動物に必要な手当てをし、命を救っています。他のNGO、地元民、ケニア・フォレスト・サービスなどと協力し、野生動物のすみかを守る活動にも参加しています。ゾウや他の野生動物が動き回れる保護区域を確保するためです。また、子ゾウが第二のチャンスに恵まれるよう、いつでもゾウ孤児救出ができるように出動準備しています。

現場での活動以外にも、アイ・ウォリー運動を通して諸政府に圧力をかけ、野生動物のために動くよう求めています。他のNGOとも協力し、大使館前での大衆デモを企画していきます。こうして、手遅れになる前にゾウのために動くよう関係主要国に求めます。また、ビデオやソーシャル・メディアを通して、象牙消費国の人々に働きかけていきます。象牙製品ひとつひとつの裏の赤裸々な事実、つまり「象牙を買う人すべてがその手を血に染めている」ということを伝えていきます。

今回の会議ではCITESはゾウを裏切ったかもしれません。しかし、ゾウのために結束して戦うか否かは、我々人間次第なのです。高知能で優しく社交的な哺乳動物であるゾウ。彼らを救える希望は残っています。皆さんのご支援があれば、ゾウを救うことができます。